

今こそ読む この1冊

潮木守一

名古屋大学・桜美林大学名誉教授

神田 真人著

『強い文教、強い科学技術に向けて』

(2012年 NPO 法人学校経営研究会)

官僚は諸悪の根源か

一頃「官僚叩き」という奇妙な現象が起こった。諸悪の根源は霞が関官僚にありと決め付ける単純至極な論理である。彼らを抹殺しさえすれば万事収まるという幻想をばらまき、票田にしようと狙ったのだろう。民衆の不満を特定の人々に集中させ、「この悪の根源を断てば、社会は良くなる」と説く手法は、決して新しいものではない。かつては世の中が悪くなると、「これこそ神の怒り」として、神の前に「犠牲の山羊」を引きだし、その命を神にささげて、災害から逃れようとした。聖書、歴史書、文学作品をひも解けば、いくらでも実例が見つかる。

本書は「官僚中の官僚」と言われる財務省主計局の主計官、それも文部科学省担当だった主計官の書いた著作である。本書を一読すれば「官僚叩き」がいかにも的外れかがすぐ分かる。まず冒頭には学界、教育界、政界、財界、言論界、労働界ばかりでなく、芸術・文化・スポーツまで含めた幅広い識者との対談が収められている。財務省主計官がノーベル賞受賞者から意見を求めるのは理解しやすいが、どうして落語家三遊亭円楽との対談が必要だったのか。

もともと落語とは、お上に対する反発の中から登場した庶民の文化である。官に依存することなく、庶民が投じるわずかな木戸銭で自立してきた活動である。だからこそ、話の中にお上に対する反感を忍び込ませることができた。要するに、お上から最も縁薄き世界である。それなのになぜ財務省主計官が落語家の意見を徴しているのか。たしかに税金を投じて造った国立演芸場は、伝統芸術の下支えとなったこともある。しかしそれよりも、落語家は毎日高座に立って、庶民の感覚を常に肌で感じ取っている。庶民感覚を逆なでする落語が受けるわけがない。庶民が何を考え



ているのか、その空気を聞き取って、すこしでも予算編成に役立てようという狙いが、財務省主計官と落語家との対話を実現させた。

データと空気から見極める予算配分

税金に頼らなければ成り立たない活動は、切り捨てて当然という見方が一方にある。しかし一国のエネルギーは様々な活動

の重なり合いの上に成り立っている。なでしこジャパンの優勝がどれだけ多くの日本人を勇気づけたことか。山中伸弥教授のiPS細胞の開発に、どれほどの誇りを抱いたことか。国にはその国ならではの顔がある。金にならないものは、どんどん切り捨てて当然とする短絡発想は、ただ日本一国を滅ぼすだけでなく、広い世界の中で独自の発展を遂げた文化を絶滅に追いやる。

GDPの2年分にも及ぶ巨額な財政赤字を抱え、先ゆき不透明な国際環境の中で、限られた国家予算をどの分野にどれだけ配分したらよいか。これを決定するのは、財務官僚の課題であり、責任であり、義務でもある。それぞれの分野がいかなる活動をしているのか、税金投入の成果はどのようなかたちで国民生活の中で生かされているのか。これを見極めるために、一方では面倒なデータを読み解きながら、他方ではそのデータでは読みきれない世の中の空気を掴もうとしている。

本書の後半では、様々な計量分析が独自の観点から吟味され、他国と比較しながら検討されている。各界の代表者との対談から得られた生の空気が生かされる場面は、この数字の読み方である。財政破綻の危機を見据えながら、とかく世間の片隅に追いやられる分野への公的投入がなぜ必要なのか、証拠を挙げながら主張しようとしている。そこから見えてくるのは財務省主計官としての気迫と迫力である。